

英国平和巡礼行脚（ミルトンキーンズ仏舎利塔〜ロンドン仏舎利塔）日誌

永瀬 行朗

イラク戦争開戦から20年。アフガン戦争開戦から10年。打ち続く戦争に英国も疲弊しきっているように思える。明年6月にはエリザベス女王戴冠60周年のダイヤモンド・ジュブリー、夏にはロンドンオリンピック開催で、世界中から多くの人々がロンドンを訪れる。戦争もテロもない世界を祈ってミルトンキーンズ仏舎利塔からロンドン仏舎利塔への平和巡礼を発願した。

8月21日

伴田上人五回忌追善供養法要に参詣させていただいた後、多くの方々に見送られミルトンキーンズ道場より出発。

8月22日

A421に出て最短の道を一路エルストウへと思ったが、時代は変わり地図に緑色で記されるA道路は高速自動車専用道となり、青色で記される高速道路と異ならず危険であり、早晚警察に捕まると判断して引き返し、閑道に切り換える。

自然歩道のグリーンサンド・リッジウェイに入った。地図を見るとジョン・パニヤン・トレイルという別名になっている。エルストウ・ベッドフォードを基点にベッドフォードの周囲を大きく一周する、ジョン・パニヤンの足跡を辿る巡礼路のようである。世界中で愛読される『天路历程』を獄中で著したジョン・パニヤンが生まれた村エルストウに巡礼し、ベッドフォードの聖ピーターズ教会前のジョン・パニヤン像前に到着。ミルトンキーンズ道場ご縁のインド人仏教徒ダリウエル家にお世話になった。4歳のライアン君がお太鼓を撃って出迎えてくれた。

8月23日

アンブシルの手前で雨になり工場入口前の木の下に小休止して雨具を着けた。振り返って工場の名前を見るとロッキード・マーティンとある。巨大武器産業である。最近2009年のスリランカの最後の3週間の包囲戦の下キュメンタリー番組が放映された由で、在英のスリランカの仏教徒に対して

も批判的な目が向けられている。2004年12月26日の津波はスリランカにも大きな打撃を与えた。民間のスリランカへの対応とは裏腹に、2005年から2008年の停戦期間中に英政府はスリランカに対する1800万ポンドに及ぶ武器輸出の許可を出している。2006年の1年だけでも850万ポンド、2009年に70万ポンド、2010年には100万ポンドの武器がスリランカに輸出されたようである。

アンプシルの街中のベンチで朝用意していた女が話しかけてきて、お菓子をつくださった。A530から近道しようと田舎道に入った。岩波文庫の『天路历程』の解説には「1660年11月12日、ベッドフォードの南方13マイルのところにあるハーリントン近在のローウア・サムゼルという小さな村でパニヤンは終に逮捕せられた」とあるが、たまたまハーリントンとロウアー・サンドンという小村を通った。無学な鋳掛屋からバプティストの牧師となったパニヤンは、国教の聖職者でもないのに説教したという理由で逮捕され、合わせて12年間も投獄されていた。

ルートンは労働者の街らしく、延々と住宅街が続いているが緑は少なく、殺伐とした印象さえ受ける。イスラム過激派の拠点となっている一方、EDL（イングリッシュ・ディフ

ェンス・リーグ）という反イスラムの極右組織の発祥の地であり拠点でもある。町工場から髭もじやの眼光鋭いイスラム教徒らしい男たちが4、5人出てきて大声で呼び止め、こちらにこいとしきりに手招きするので、行つて話をした。「お前は何をしている。なぜ太鼓を撃っているのだ」「平和を祈つて歩いている。太鼓を撃つのは日本の仏法のお祈りだ」「仏教では何が大切か」「人を殺さぬこと。人を敬うこと」「それは本当だ。すばらしいことだ。世の中は戦争や暴力ばかりだ」「お前はどこからどこへ行くのだ」「ミルトンキーンズからロンドンまで。今日はベッドフォードからルートンの中心の聖ジョージスクエアまで。あと何キロくらいか」「2、3マイルだ」。機械油で汚れないように薄いゴム手袋をしたままの手で力強く握手して、みんなで励ましてくれた。

聖ジョージスクエアに到着し、迎えてくださったマーガレットさんにお題目を三唱し終えると、ちょうどスクエアの鐘が6時半を告げた。聖ジョージは童退治で知られる伝説的聖人で、イングランドの守護聖人である。英国で武勲のあった軍人に授与される最高位の勲章は聖ジョージ十字勲章だが、聖ジョージはパレスチナのローマ兵であったがキリスト教に帰依して良心的兵役拒否者となり、西暦303年頃、激しく拷問され斬首された殉教者である。悪魔の恐れる慈悲の人、

非暴力の勇者、聖ジョージを、イスラム教徒もイスラム教の聖人アル・ハダーとして敬うようである。

8月24日

聖オーバンズという丘の上の美しい街に入った。古い歴史のある街らしく、坂の多い街並みは一層の趣がある。絵心などなくとも歩を止めて絵でも描きたくなる美しい街である。地図を見るとローマンブリテン時代のヴェルレミアムというローマ人の大きな都市跡がある。美しい大聖堂が目に入ったので立ち寄った。聖オーバン大聖堂である。中に入ると女性の牧師さんが入口におられ温かく丁寧に迎えてくださった。聖オーバンはヴェルレミアムの市民で、ローマ兵に追われてきたキリスト教の僧侶を自宅に匿った。敬虔で信仰深いこの僧侶の姿に心を打たれキリスト教に入信し、ついに踏み込んできた兵士に僧侶の僧衣を着て身代わりとなって捕らえられ、僧侶を逃した。僧侶を逃した罪を問われ、棄教を迫られ拷問されても屈せず、西暦250年頃、英国最初のキリスト教殉教者となった。この大聖堂の丘が聖オーバンが処刑され埋葬された所で、その聖骨が納められた聖オーバン堂が大聖堂内にある。多くの巡礼者、参詣客が国の内外から訪れる霊場である。

ワットフォードで伴田上人と親しかったカソリック・ワーカー・ファームのスコット氏と若いスウェーデン人女性のマリアムさんに車で迎えていただき、ウエストハイドのファーム（農場）に案内していただいた。

8月25日

ノースウッズの学校の教師をしておられるマリアさん（スコット夫人）に車で司令部の近くへ連れて行っていただき、マリアさんとともに司令部正面ゲート前まで歩き、ご祈念。カソリック・ワーカー・ファームからは毎週木曜、アフガン戦争終結を祈ってピジルに来ておられる。

激しい雨の中、A404からまっすぐ東に向かいA5に出て一路南下。ロンドンに入り米大使館前のグロブナスクエア内の9・11追悼記念碑、ハイドパーク内にある7・7追悼記念碑にご祈念し、夕刻、ロンドン仏舎利塔に到着。西天開教記念日で丸田法尼様、ミルトンキーンズ道場の信徒の方々を伴い来山して仏舎利塔の給仕をしてくださり、道場を荘厳し、スリランカ料理でお迎えいただいた。多くの方々にお世話になり励まされ、無事、アヒンサの太鼓を轟かせ、歩き通させていただくことができました。